

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟 選

目隠れど富士の煙や一蝶忌

沼津市 川井大次郎

△評▽江戸幕府により三宅島に流された絵師・英一蝶の心情を思ふユニークな句。富士山はその頃宝永の大噴火を起こした。石投げて変わらぬこの世年の暮

大阪府 湯浅 喬

△評▽実際に石を投げたわけではない。世の中を変えられない無力感を詠ったのだ。かくれんぼするには怖き枯野かな

白井市 毘舎利道弘

警笛は長く尾を引き冬の霧

香芝市 河野 嘉雄

寒波来る水道局の広報車

小林市 黒木 暢

冬ざれや暮色に並ぶ空車灯

下野市 石井 光

参道は濡れて大きなしぐれ虹

東京 木幡 忠文

底冷えの銀座のバーのネオンかな

千葉市 石野 勤

寒雀か細き枝へ飛び移り

入間市 小林 水迷

田塀を登れば近し冬の空

鴻巣市 黒巢 友子

西村 和子 選

配達足跡消して雪積もる

六栗市 宗平 圭司

△評▽雪が休みなく降り積もる。人が来て去った跡も気配も消してゆく。生活の音まで吸い込まれてゆくようだ。静寂が広がる。家用に外出用に冬帽子

京都市 小島 一男

△評▽家の中にももしんと底冷えがする。そんな寒気を具体的に表現した手柄。梟やときをり人の貌をして

紀の川市 竹中 俊和

短日をきつちり使ひ庭仕事

加須市 萩原 康吉

人影のはたと消えたり冬木立

大阪府 佐藤 順子

人の手をはなれ幾年茶の咲けり

大阪 池田 壽夫

悪声を四方に振りまき初鰯

長浜市 中島 正則

初刷や新聞受けに納まらず

鴨川市 富川 康雄

肋なす枯蓮に日矢刺さりけり

横浜市 相沢恵美子

ものぐさのいよよものぐさ寒の入

春日市 林田 久子

井上 康明 選

少年の眠となり探す龍の玉

盛岡市 福田 栄紀

△評▽龍の玉はシャノヒゲの実。少年の目がいきいきとした好奇心を思わせ、とがった葉むらの奥の青い龍の玉、冬の季節感と通いあう。我が母の故郷の島を恵方とす

唐津市 梶山 守

△評▽母の故郷の島の方角を恵方とするという。正月の日を浴びる海の上の美しい島が浮かぶ。ものの影淡くなりゆく春隣

北名古屋市 月城 龍二

潮騒のなだらになりぬ龍の玉

富士市 後藤 秋臣

梅檀の金色の実の鳴りにけり

千葉市 伊藤 節治

ストーブの鯛は踊り縮むなり

和泉市 杉 崎

いつまでも若き父母花八手

高松市 島田 章平

凍雲の大海をゆく星ひとつ

相模原市 小山 鞠子

行く水の見え隠れして去年今年

奈良市 奥 良彦

父の背に眠るおとと初詣

川崎市 久保田秀司

片山由美子 選

無心とはこんな時かと毛糸編む

見附市 岡村 文子

△評▽編み物に集中しているときの心境。ほかのことを考える余裕もないのかもしれないが、上五・中七に説得力がある。賑はしき生田の森の寒鴉

神戸市 常澤 倅子

△評▽生田の森は源平合戦の古戦場。人影の少ない冬の生田神社にカラスの音が響きわたる。落日のひかりのなかの枯尾花

八女市 水町 好江

ジョギングの寒さに突る鼻の先

金沢市 岩本 卓夫

日溜りの軒端に跳ねて初雀

和歌山市 宮本 啓子

はち切れむばかり真赤な林檎剥く

和歌山市 武友 朋子

急かされて追ひ立てられて年の市

岐阜市 水上れんげ

咳一つ待合室の静かなる

福岡 手島喜美江

あをあをを宿木育つ御神木

町田市 枝澤 聖文

糲殻焼く煙地を這ふ夕景色

安中市 大澤信太郎



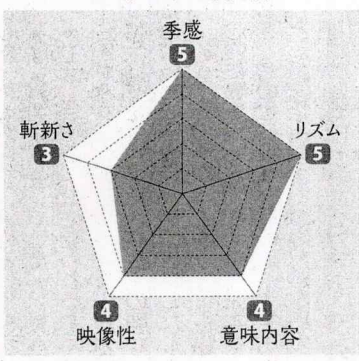
注目の一句

円堂実花

賀状書くポストの赤の頼もしく

三月

チャートで採点



季語「賀状」の一句。デジタルコミュニケーションの普及をはじめとするさまざまな要因により、年賀状を出さない人が増えていますが、作者は出す人なのでしょう。ポストの色が赤になったのは、1901年のこと。当初は黒でしたが、視認のしやすさなどから赤が採用され、おなじみの色となりました。

下五の「頼もしく」に、郵便制度や、それを機能させるために働く人たちの思いが感じられます。ポストに投函したはきが日本中どこへでも均一の料金で届く便利さや、それらを無事に届けるため、元旦から働く人たちがいることのありがたさを改めて感じられるのも、年賀状の良さかもしれません。(えんどう・みか俳人)

アプリ
俳句てふてふ

全国景勝地俳句コンテスト 俳句てふてふは富士五湖や耶麻溪など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930(昭和5)年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。

アプリのダウンロードはこちら